



窮兒の悪くなる有様

ひさ子

私は此前に東京市養育院に付て書きまして、同院感化部の事は次號にでもと申しておきました。がまづ初に同部に居る少年、即ち窮兒であつて普通の世の中にすておいたならば、どんなに悪くなつたか分らないやうな浮浪少年の、普通の世の中に於ける種類や變化を述べたいと思ひますから、同院の許可を得まして、けふはひとつ先年同院で取調べられました「窮兒悪化の状況といふ小冊子の

一部を御紹介することにいたしました。

一 窮兒の種類 父兄に置き去りにせられたもの、棄てられたもの繼子で繼親から放逐されたもの、親が乞巧をして子も亦乞巧であるものなどが

主なる種類で其外にも種々の事情に出るものが多くありませう

くありませう

一 窮兒の變化 右のいろいろの窮兒は皆獨立で

正しく生活する力のないものでありますから、乞

巧となり、掏摸となり、窃盜となり、遂には強盜

となり、又は行旅病者となるといふ情ない境遇を

経るものが多い。

窮兒であつて人の袖にすがり、人の軒に立つて哀

を乞ふものは五六才以上十一二才以下が多いの

で、風姿を紙屑拾ひのやうにして、種々の小盜を

するものは十才以上十四五才まで位のものが多

そうして只乞巧をする方のは多くは大人が其蔭に居て之を使ひ、なるべく哀れそうに見せかけて、他の哀憐の情を惹かんとするもので、十年以上となると人の哀憐の情を惹くことが少くてもらひものが少い爲に止むを得ず盗んでゐ、生活するのである。

一ポタハジキ及カツバラヒ 之は前のやうな境遇を經過して成長した窮兒が將に掏摸窃盜などに變化して行かうとする一階級の名稱である。そうしてポタハジキといふのは掏摸の雛であつてカツバラヒよりは一層利發で好方に長したもので、十四五才十五六才の者が多い、彼等は縁日又は種々の群集をあてこんでこまかい金品をすりとするので別に親方には屬して居らぬ、但し其中の敏腕な者は漸次親方に屬して眞の掏摸に化してゆく。カツ

七十一
バラヒといふのは多くは紙屑拾の姿をして居て、紙屑や襤褸を拾ふと同時に他人の隙を窺て、衣類其他履物などを手當次第に盗み去るので、其他辻店食物店の物神佛の賽銭などを盗む者があゝる。之等の悪少年は晝夜種々の手段を研究してかゝる悪を働くもので悪事にかけて辛抱つよいのは驚くべきほどである。そうして其働の巧妙な者は窮兒群中の兄株に尊ばれ、遂には多くの窮兒を役して親方となり、子分から収入高の幾分かを徴収して彼等は乞巧の方法から悪事を働く手段を教授するのである。

十四五才までに、之はとまでの境遇を経たものはなほ成長するに従て如何に成行るか實に彼等の成長は社會に大害を流す泉源と化するので考へれば考へるはと戰慄せずには居られぬ。

一ボタハジキ拘摸となる。何處の市街にも拘摸

の多いことは甚しいもので、世の中が其害を蒙る

ことも實に甚しい。そうして拘摸の中、十中の八

九はかの窮兒であるボタハジキの轉化したもので

ある。そも／＼窮兒が拘摸と化するには二種あり

て、一は拘摸の親方又は其子分から撰拔せられた

もの、一は窮兒の親方から推撰せられたものである。

即ち窮兒の中で好方ありて、敏捷な者は眞の

拘摸、又は窮兒の親方から撰擧されて眞の拘摸と

化するの、かやうにして拘摸群中に入るのは實

に彼等にとりて立身の一階級を昇りたものゝやう

になつて居る

一拘摸の状況 拘摸は幼きは十一二才から十五

六才十八九才の者が多く皆親方に屬して日々其教

授を取つて使役さるゝものである。下等の拘摸は

其衣食住皆親方が支給するので、其稼の割前は更

に親方から與へられる、又たとひ獲物はなくとも

衣食に離るゝとはないので、小使錢まで與へられ

るといふことである。中等以上となると、衣食住

は自分持で之から以上になると親方の手を離れて

獨立し、舊友である窮兒の中から役に立つ者を撰

て自分の手下を拵へ業を擴張するのである。流車

中の稼又は田舎人をだまして金をとるなどは親方

連中連合の仕事で、手下にはとてもなし得ない。

かやうな親方になつた拘摸は實に窮兒が最極の立

身出世といふべきである。

拘摸の親方と親方との間、及仲間の間には何れも

聯絡があり、又嚴密な規則があつて、子分たるも

のはぜい其規則に服従しなければならず、又たと

ひ捕へられても決して其親方との關係や、仲間

事を白状するものではない。

拘摸は大抵十八九才までに、少くとも一二度は必ず監獄に投ぜらるゝが、此時にさすがに内心に自分の業を厭ふ心が起る。さりとて幼児からした事は悉く悪事で、見聞皆正業でなかつたから正業を思ふ念は少しも念頭に浮ばない。其上に獄中で強盗又は詐偽など、種々の悪事を聞いて悪念が増長し出獄してからは、前に上越す悪人となり、終身獄屋住居をするものも随分多い。

一立ん坊。窮兒中の不敏な者、愚かな者は奸智を要する拘摸窃盜のやうな仕事には到底不適當であるから、幸にも拘摸の親方又は舊知人の揀拔を蒙らず、やはり相變らず窮兒として日を送るのである。けれども成長するほど人のあはれみを受け、紙屑が少く、乞丐では生活ができない爲に、

拾ひ、魚腸拾ひ立ん坊などの職業を見付けて従事する、之等は別に人を害しないけれども、一朝病にかゝると必ず警察の手を経て公共の救助を受けなければならぬ。行旅病者として、年々養育院に収容さるゝ者の過半は此類である。

一カッパライ窃盜となる。前に述べた乞丐、屑拾ひ、小盜の三事を兼業するカッパライといふ一種の者は、研究に研究を加へて悪事年と共に増長し、巧になり遂には専ら窃盜を事とするに至るのである。そも、彼等は幼稚の時からすこしも教育を受けず、只他の金品を奪掠する法を教授され又自ら練習して成長したものであるから、才智も専ら悪事に向て發達し、盜は悪であるといふ事さへも知らぬ。従て入獄しても、改悛の念は起らず、却て悪くなつて出るといふのが多い。

以上述べ來つた事情に由り、窮兒といふ者の結局は左のやうになる

- 一 智ある者は掏摸強盜となり、監獄に入る。
- 一 無智の者は立ん坊となり、行旅病者となる。
- 一 不具廢疾の者は純粹の乞丐となり、行旅病者となる

わゝ、此通に窮兒は智ある者、智なき者いづれもかなしい肩を結ぶものであります。之等は如何なる程度まで世を害し、人を毒して居りませうか。窮兒を放棄した結果はどれほどまでにかそろしいものでありませうか。かやうな者を世の中に現出させる原因は果して何處にありませうか。已に現出して居る以上は之をどうしなればなりますか。

かみなつき (十月)

せく生

晝夜平分たる御彼岸のすぎ去りてより、夜の次第に伸長するにつれて、晝はますます短縮し、宇宙の光景は日を追ひて、只沈みに沈み行く程に、常盤山いろどり月もはや過ぎて、錦織りなす佐穂姫のひとり舞臺さへ何時しか幕も下りなむとす。垣根の朝顔、花盆の黄菊やうく小く咲きて、一二つ葉がくれに見ゆるを、誰一人だに振り向きもさへせねば、其のはじめの事、いとゞ思ひ合せらるゝになむ。まして日の暮れて、松虫鈴虫の鳴きさわり、聲のはかなげなる、椽の下、壁の中など、疲れくゝてコロコロとも言はぬ蟋蟀の聲に、こまかき雨バラくゝと音して、垣根の上蔽へる芭蕉葉を叩くなど、老いたる人、憂もつ身の聞さも

せば 其の感果して如何ならむ。

平安朝の歌聖、貫之大人は咏ずらく

立田山にしき織りかく神無月

時雨の雨をたてぬきにして

神無月かざりとや思ふ紅葉ばの

やむ時もなく夜さへにちる

ちはやぶる神無月こそ悲しけれ

誰を戀ふとかつねにしぐる、

時雨れ時雨る、夜の晴間の月よ、十三夜の其れ

としもふもはれぬなり。やがて吹く風冷かに、朝

なくにおく霜有明の月影に、雁金の聲まれなる

いとすごし。

神無月の名のいはれ亦さま／＼なり。

水戸義公光圀卿の御隨筆には雷のなき月ゆゑか

みな月といふと記されしぞ動さなき説と思はる。

されど尙面白く尤もらしきものある中にて、最も古く理屈をつけし、例の鎌倉時代の清輔朝臣は、

「十月は天下の諸神出雲國に行きてこゝ國には神

なきが故に神無月といふを詔りていへり」といひ

て、俗人の耳をうなづかせたれば、人々大抵は此

の傳説的の附會説を信とせり。

尙十月は伊弉册專の崩御ましまし、月なれば神

のなくなれる月といふ意味にて神無月といふと信

する人もあり、又十月は神嘗祭をする月にて神嘗

月をなまりたりと主張し、特にこじつけらしきは

十といふは數の極みにてこれより上の數は只重ぬ

るのみなれば、即ち十は數皆月にて訛りてはかみ

な月となるなりといふ類は、只古人の想像の面白

かりしを感ずるの外なかるべし。今神無月の外十

月の異名の歌一つ二つ記しめん。

時雨月(定家卿)

ちりはてし木の葉の後のしくれ月

冬のはしめに何をそめまし

拾月(顯昭法師)

秋の色のかはりはてぬる拾月かな

松より外は残る木もなし

初霜月(長明)

草も木もはつ霜月の朝ほらけ

なかめも白き人のをちかた

牧羊閑話

牧羊

五月二十八日の朝、皇后陛下の御誕辰を祝ひ奉

る時、五六才を上四才位の子供四五人、

「やー、先生」

と叫んで、僕の所へ、不意打突る様に飛びかゝつて来た。

「先生、今日は旗日ですね」と一人が、言ふから

「何の旗日だ」と聞くと

「皇后様の御生れになつた日です」といふ

「皇后様と仰るのは」?と問ふと

「日本の天子様の奥様です」と答へる。尤も皇后

様は男でいらつしやるか女で居らつしやるかに付

いても大分八釜しい議論があつたのであつたが、

比較的先の答が一番正しかつた。そこで

「そんなら日本といふのは何處だ」?と聞くと、

皆が一樣に

「分らない」と答へる。夫にも係らないで

「日本と幼稚園とは、何方が大きい」?と聞くと

「そりや日本の方は大きい」!!! といふ

「そんなら學校とは？」と聞くと、一人は、

「學校の方は大きい」といふし、一人は「日本の方が大きい」と云ふし、中々決しない、そこで一

歩進めて、

「東京とはどうだらう」と聞いた所が之は疑ひなく決せられた

「そりや東京が大きいわ、ねーずーつとあつちの本郷からだもの」!!!

兒育教育の任にある人は、此無邪氣の言葉から何か見出され相である。

僕が何時か、英語の歌を歌つて居ると、今年四つになる福ちゃん走つて来て一寸耳を傾けて見て、

「伯父さん、それどここの歌なの？」

知らぬ顔で夫を獨乙語で答へた所が福ちゃん

まことに氣に入らぬ顔をして

「あら、いやだよ此伯父さん 酔ばらひの様なことを言つてるよ」!!!

五になる子でも酔ばらひの言ふ言葉は、分らぬものさ定めて居る。

五から六つ位の子供を集めて、加藤清正の虎狩りの話しを聞かせてやつた所が、如何にも尤もらしい顔をして感心して居たので、

「どーだ、加藤清正と桃太郎と、どつちが強いだらう」?

と問ふと、皆が言ひ合せた様に

「加藤の方が強い」!!!

と答へたから

「夫でも桃太郎は 鬼を退治したではないか」?

と聞くと

「けども 鬼よりか虎の方が強いのだもの」!!!

この時分から 三段論法の堆理式を應用して居るのが面白い。

來年四月、小學校に入る男の子が、しきりと石盤に繪をわいて居る。見た所、兩方から旗が出て居る所なのであつた。

「信ちゃん、何を畫いて居る」?

すると信ちゃんはひよいと顔を擧げて

「日英同盟なんです」

そこで僕は又、

「日英同盟って、何の事かね」?

信ちゃん、澄したもので

「それはね、日本と英吉利とが、こんな風に旗を立て、ね、燈灯なんか、幾つもブラ下るんです」!!!

言葉だけ知つて、内容の無いこゝろが、子供には有り勝なり。

秋の林

清涼なる空は、嚴格なる夏を送りて、秋陽漸く白く、軟風一陣満目数十里、なべて鮮黄に飾られ禍と紫と紅とのくさくさの點綴さへ加はりて、中に此處彼處と常緑樹の黒く聳ゆるあるのみ、此秋の支配に、踏み止まりて抗争しつゝ、雛菊、翠菊、鋸草などの咲き残りたる、さては木苺の實りたる秋葉黃の残りたる、藪萬兩のふさふさしたる、芒の長くサワ／＼招くあり。

○風は蕭々として林中を通し、既に弛みし樾、木毛擧などをふるい、颯々として、胡桃も樺も、松樺などの毬果をも拂ひ去る、林間、風靜に波穩なる池邊、小鴨のゆれ行くもの二つ三つ、鴻雁時に幽に中空を渡り、林禽の歌ふもの、既に去つて久

し。

何たる喧噪ぞ、轟然として林中に襲ひ來りたる
 吁是れ何たる何等の雜鬧ぞ、栗鼠は枝に武者振着
 き、老狐は奔竄し、兎は身を屈め耳を尖らし、憶
 病なる牝鹿は廣野を求め、牡鹿は近く茂みに姿を
 隠し、鴨、鴨、鴛鴦など葦間に遁げ匿くる、憂々
 の音は續き、鬻々の吠は頻なり、其間時々銳聲爆
 然として叢に轟く、げに總ての禽獸の安穩を攪亂
 するものは、狩獵なり。……其寢床より驚起
 して、兎は脱然として走り、彈丸は迸り、走狗は
 跳びかゝり、斯くて討ちとられたる禽獸は、皆獵
 夫の囊に投げ入れらる。暴き狩獵は尙暴れて、林
 の邊にて、鷓鴣の一群は飛び起ちて、砲聲は更に
 爆發し、又もや其半ダースは地に落ちぬ。此雜鬧
 の近づきしより、葦間を高く飛び上りて、池の鵲

鴛鴦、鴨など命からく、逃げ翔る。

喧噪は尙遙に續きて遂にやうく止むや、忽に
 して、啄木鳥は再び蟲を求めて、丁々と樹を敲き
 始め、鸛、山雀、知更鳥、鶴鴒等羞しげに出で來
 る。

是に於てか、散り行く木の葉と、彈丸に仆れし
 禽獸とが、道獨り行く旅人に起さしめたる「死の
 感想」も、何時しか消えて、斯くまでも魔はしく
 秋の林を彩り給ひしその神は、げに「生命の禱」
 なりといふ意識は、自から起らざるを得ざるなり

(まか生 譯)

●學びの窓

●女子高等師範學校 來年四月文科理科藝科
 に各二十五名の生徒を入學せしむる由志願者は來